



● 弘文堂入門双書

現代文化人類学

石川栄吉編

現代文化人類学

石川栄吉 編

弘文堂

執筆者紹介 (掲載順)

石川榮吉 (いしかわ・えいきち)

1925年生れ。東京都立大学人文学部教授。

清水昭俊 (しみず・あきとし)

1942年生れ。広島大学総合科学部助教授。

山路勝彦 (やまじ・かつひと)

1942年生れ。関西学院大学社会学部助教授。

牛島 巖 (うしじま・いわお)

1938年生れ。筑波大学歴史・人類学系助教授。

小松和彦 (こまつ・かずひこ)

1947年生れ。信州大学教養部助教授。

唐須敬光 (とうす・のりみつ)

1942年生れ。慶応義塾大学文学部助教授。

阿部年晴 (あべ・としはる)

1938年生れ。埼玉大学教養学部教授。

現代文化人類学

【弘文堂入門双書】

昭和53年10月10日 初版1刷発行

昭和55年5月30日 同 6刷発行

◎編者 石川 榮 吉

発行者 鯉 淵 年 祐

株式会社 弘 文 堂

101 東京都千代田区神田駿河台1の7-13

TEL (294) 4801

振替東京2-53909

1036-563600-2281

港北出版印刷・井上製本

まえがき

——本書の方針と構成——

文化人類学がわが国の大学アカデミズムの中に正規の座を与えられたのは、ようやく第二次世界大戦後のことであり、この学問の歴史はわが国においてきわめて新しい。これに先立って、文化人類学の研究の実質が、少数の先駆者によってすでに明治期から手がけられていたことは事実にしても、その伝統の根はまことに細いものであった。

それが今日では、多数の大学において教養科目としてはもとより、専門課程の講義の中にも取り入れられ、また一般読書界にあっても、この学問の成果に対する関心には、なみなみならぬものがあるかに見うけられる。こうした文化人類学をめぐる状況の変化には、次に挙げるような幾つかの理由が考えられよう。

戦後のわが国を掩ったアメリカ文化の強い影響の一つとして、アメリカにおいて早く発達をみていた文化人類学が、戦後日本の新しい構築をめざす日本人の目に、いかにも新鮮な学問として映じ、積極的に受容されたこと、これが文化人類学をわが国の学問の中に定着させる契機となったことは確かである。しかし、そのうえで文化人類学の今日の“盛況”——もちろん相対的な意味で——を招いたのには、一口に言って日本人の国際的視野の拡大という事情があずかっている。

具体的には、戦後いわゆる第三世界の国際政治上の比重が飛躍的

に増大するとともに、これまでの欧米一辺倒の姿勢を保ち続けがなくなったこと。加えて、わが国経済の高度成長により、日本の経済進出が文字通り地球のすみずみにまで及ぶようになったこと。そしてこれに関連するいわゆる“海外旅行ブーム”。こうした事情が、非ヨーロッパ的な社会と文化を伝統的に主要な研究対象としてきた文化人類学に対して、社会の関心を高めさせることになったと考えられる。比較文化論の流行も、これと同根であろう。歴大な規模と設備を誇る国立民族学博物館が1974年に創設をみたことの背景にも、学界関係者の学問的要望とは別に、そうした社会的要請もあったはずである。

しかし、これだけが考えられる理由のすべてではない。とくに近年における、西欧＝アメリカ型近代文明、あるいは近代化主義に対する深刻な懐疑という、より内面的な因子も挙げなければなるまい。高度産業化社会の行き詰まりの中で、西欧＝アメリカ型文明の価値が問い直され、あるいは人間の復権が問題とされるとき、「人間の科学」を標榜する文化人類学に、既成諸学からは得られぬ新しい視野の展開を期待する向きがあったとしても、決してゆえなしとしないであろう。しかしながら、文化人類学がその期待にこたえるか否かは、これまでの文化人類学の成果によってよりも、むしろ今後のこの学問の展開次第であろう。

さて、本書は、これから文化人類学を学ぼうとする学生諸君のための入門書、あるいは、この学問に関心を抱く一般読書人のための教養書として編まれたものである。本文第Ⅰ部に述べるように、文化人類学の対象領域は広範で、物質文化から精神文化さらには精神

そのものに至る文化の全領域を含み、しかもそれを共時的にも通時的にも扱うものとされている。たしかに、文化人類学は文化をトータルにとらえることを志向した学問ではある。しかしながら、少なくとも現代のこの学問においてその意味するところは、文化の全領域を網羅的に取りあげることではなく、文化を全体関連的な視点から理解するということに他ならないのである。本書は、もちろんこうした視点をとるものであり、かつて人類学の父タイラーがその著『人類学』（1881年）で為したような、そしてアメリカの文化人類学概説書がしばしばそうであるような、網羅性を志向するものではない。入門書としてその必要はないと考えるし、紙幅もまたこれを許さないからである。本書では、文化人類学の最も核心的な諸分野、諸問題を提出することによって、この学問への接近の道を拓くことを方針とした。

こうした方針のもとに、本書は、文化人類学の基本的課題とその具体的展開の略史を示した第Ⅰ部（序論）ののちに、本論に当たる第Ⅱ部において、まず、文化人類学者の現地調査の場で第一の直接の観察対象となる共同体の、生活の統合性を時間・空間軸に沿って考察したうえで、つぎに、生活の社会的、政治・経済的、宗教的側面を順次分析的に概観する。ある意味で人間の社会生活の基礎ともいえる言語についての考察が、これに続く。そして、第Ⅲ部では、文化人類学が伝統的に主要な研究対象としてきたいわゆる未開民族の文化を、いわゆる文明民族のそれとの対比において、その特性を明らかにし、そのことの研究がもつ現代的意義を考える。それは、文化人類学の本質論でもある。本書はこのような構成で編まれている。巻末には、個々の問題についてより深く知ろうとする人びとの

便宜のために、「文献案内」を付した。

執筆に当たっては、編者自身による第Ⅰ部のほかは、各部・各章ごとに、それぞれの分野を得意とする、現代のわが国人類学界の第一線に活躍する、新進気鋭の文化人類学者もしくは社会人類学者に担当していただいた。編集ということが、各執筆者の原稿の単なる寄せ集めで終わらぬよう、執筆までに数回の会合を重ねて意思調整をはかり、全体の統一に配慮したつもりであるが、なおその点で不備があるとすれば、その責は編者一人の負うべきものである。

本書が、文化人類学という学問への興味をいささかでも喚起し、また、この学問への関わりをより深めていくうえでの糸口ともなるならば、それは執筆者一同の大きな喜びである。

最後に、分担の諸氏の熱心なご協力に深謝するとともに、本書刊行までの間にひとかたならぬお世話になった弘文堂編集部の小林忠次、三徳洋一両氏にも、心からお礼を申し上げたい。

1978年盛夏

編 者

目 次

まえがき——本書の方針と構成——

第Ⅰ部 文化人類学の課題と方法 石川 栄吉

1. 人類学の基本的課題…………… 1
2. 民族学・社会人類学・文化人類学…………… 3
3. 文化と民族…………… 5
4. 文化の統合と変化…………… 8
5. 文化人類学の諸傾向…………… 11

第Ⅱ部 文化の構成

第1章 生活の諸相 清水 昭俊

1. 生活の定義…………… 27
2. 一日の生活…………… 29
3. 一年の生活…………… 41
4. 人の一生…………… 54
5. 生活世界…………… 61
6. 生活…………… 81

第2章 生活集団 山路 勝彦

1. 社会生活の基軸…………… 89
2. 居住の場と共同体…………… 91
3. みうちと他人…………… 99
4. 老人と若者——年齢・世代・性——…………… 123

第3章 政治と経済

牛 島 巖

1. 部族社会の政治と経済…………… 129
2. バンド段階の政治と経済…………… 131
3. 部族段階の社会・政治・経済機構…………… 137

第4章 宗教と世界観

小 松 和 彦

1. 世界観と信仰体系…………… 161
2. 宗教…………… 167
3. 儀礼と神話…………… 182
4. 象徴的表現としての宗教…………… 190

第5章 言語と文化

唐 須 教 光

1. 象徴体系としての言語…………… 204
2. 文化としての言語…………… 206
3. 言語としての文化…………… 218
4. 言語学と文化人類学…………… 228

第Ⅲ部 未開と文明

阿 部 年 晴

1. 民俗概念としての未開と文明…………… 237
2. 文化人類学における未開と文明…………… 244

文献案内…………… 269

索 引…………… 279

第Ⅰ部 文化人類学の課題と方法

1 人類学の基本的課題

人類学は、他の多くの学問と同様に、元来ヨーロッパにおいて成立し、発達をみたものである。

それは、ある社会の人間が、身体形質や言語・風俗習慣などについて、自分たちとは異なる人間集団——異人・異族——を発見したときに芽生えたものであるが、このような経験はおそらくあらゆる民族がもつものであり、決してヨーロッパ人だけの独占物ではなかったはずである。よく引かれる例であるが、古代エジプト人はすでに彼らをとりまく異人の存在を知り、その墳墓の壁画にエジプト人と区別してアッシリア人・黒人・リビア人を画き分けていた。古代中国人も、たとえば東夷・南蛮・西戎・北狄というように異族の存在を認識していた。ヨーロッパ人の場合にも、そのような異族認識は歴史的に古代ギリシャにまでさかのぼることができ、それで、人類学の発祥をこの時代にまでさかのぼって迎ろうとする科学史家もいる。

しかしながら、なんといってもヨーロッパ人によって開かれた近世初頭のいわゆる大発見時代が、ヨーロッパ人に非ヨーロッパ的な異人・異族に関する情報を、前代までとは比較にならぬ規模でもたらすこととなった。さらにそれに続くヨーロッパ人の世界制覇の時代は、その効果的達成のためにも、異人・異族に関する情報の集積を

促がすこととなった。このようにして、地球上に存在する人類の多様性がヨーロッパ人の間に知られるようになったとき、その多様性をどのように整理し、体系的に理解するかということが必然的に次の課題として浮かびあがってきたのである。これが人類学 (anthropology) の誕生である。この名称はギリシャ語で人間を意味する *anthropos* と、知識とか学問を意味する *logos* とから合成されたものであり、以来、人間の科学を標榜するこの学問は、人類の集団的変異と類似を記述し説明することを基本的課題としているのである。

しかしながら、一口に人類の変異と類似といっても、人類は他の動物と異なって言語をはじめとする文化をもつ存在であるから、人類の自然 (身体形質) と文化のどちらに着目するかによって、対象領域ばかりか研究の方法も異ならざるをえない。すなわち、人類学は必然的に大きく二つに分化せざるをえない宿命を、その学問の成立の初めからになっていたのである。

その際、ヨーロッパ大陸、なかんずくドイツ、オーストリアでは、人類学という名称をもっぱら人類の自然 (身体形質) 面の研究にかぎって用い、文化面にかかわる研究には民族学 (ethnology) の名称を用いるのが普通であったし、現にそのような用法が行なわれている。ドイツ流の学風の影響を強く蒙ってきた第二次大戦前のわが国でも、そうした用法が踏襲され、その傾向はたとえば「日本人類学会」、「日本民族学会」、「国立民族学博物館」などの名称に見るとおり、今日でもなお根強いものがある。

他方、ヨーロッパでもイギリスは、人間の自然・文化両面を総合して研究する人類学に対して、とくに文化面を対象とする部門に文化人類学 (cultural anthropology) という名称が使われたこともあったが、現在では文化人類学に代わって社会人類学 (social anthropology) の名称が一般化している。

これに対してアメリカ合衆国をはじめとするアメリカ大陸の多く

の国々には、かつてのイギリス的用法に従って人類の自然（身体形質）的側面を研究する自然人類学もしくは形質人類学（physical anthropology）と、文化的側面を研究する文化人類学、そして両者を総合するものとしての人類学という三つの名称の使用法がみられる。

このように述べてくると、ドイツ、オーストリアの人類学はアメリカの自然人類学に相当し、また、ドイツ、オーストリアの民族学がイギリスの社会人類学やアメリカの文化人類学に当たるものと考えられるかも知れない。しかしながら、上記のうち人類学（ドイツ、オーストリア）＝自然人類学（アメリカ）は問題ないとしても、民族学（ドイツ、オーストリア）＝社会人類学（イギリス）＝文化人類学（アメリカ）という等式は、厳密には成立しない。この三者のあいだには、名称ばかりでなく、内容にも若干のずれがあるからである。三者とも非ヨーロッパ的な、なかんずく無文字民族（いわゆる未開民族）を伝統的に主要な研究対象とし、集団的差異と類似に関心を向けて比較研究を重視する点は共通しているが、同時につぎのような相違もあるのである。

2 民族学・社会人類学・文化人類学

民族学は、ごく抽象的に性格規定をすれば、諸民族文化の比較研究もしくは一般モデルによるその解釈ということになるが、その主たる関心は無文字民族の歴史、もしくは文献記録や考古学的資料を欠く事象についての歴史を再構成することに向けられている。その歴史再構成の方法として比較法が用いられるのであり、その際、一般歴史理論が導きだされる場合もあるが、概して民族学は理論的というよりは、記述的な学問である。後述するようにヨーロッパ大陸ばかりではなく、イギリスにおいてもアメリカにおいても、異民族・異文化に関する研究の初期には、こうした意味での民族学的傾向が

顯著であつた。

民族学に類した名称に民族誌学 (ethnography) があるが、これは現地調査にもとづく特定の社会と文化の記述である。

社会人類学は、かたくなにまでこの名称を固執するイギリスの学者、なかんずくイギリス社会人類学派の創始者であるラドクリフ＝ブラウン (RADCLIFFE-BROWN, A. R.) によれば、人間の社会関係の分析に重点を置いた理論科学であり、比較社会学とも呼ばれるものである。そこでは、直接的な観察の不可能な抽象概念にはかならぬ“文化”——と彼らは言う——ではなく、具体的な観察の可能な人間の行為を介しての社会関係の研究——分析と理論化——が課題とされている。歴史的な関心と、次に述べるアメリカ流の文化人類学に一般に認められる心理学的な方法も、ともに拒否されるのが普通である。

民族学、社会人類学が、それぞれ個別・独立科学であるのに対して、アメリカ流の文化人類学は、前記したように総合的な人類学の一分科であるうえに、文化人類学自体も一個の総合科学と考えられている。すなわち、文化人類学は一般に、先史考古学 (prehistoric archaeology)、民族学、社会人類学、言語人類学 (linguistic anthropology)、心理人類学 (psychological anthropology) などの諸分野から成るとされるのである。これらのうち、先史考古学はとくに民族学と互いに補助的な関係に立つことの多い分野であるが、きわめて専門化された技術を必要とするので、文化人類学とは独立の科学として扱われることもある。イギリスを含めてヨーロッパ諸国やわが国では、そうした傾向がとくに強い。言語学も独立科学として扱われることがあるが、言語は文化や社会と関係するところが深いので、この面を強調する研究は言語人類学の名称で文化人類学に包括されることが多い。心理人類学もこれに似て、心理学と文化人類学とにまたがる部門であり、文化とパーソナリティの関係、民族性、文化と

心理的適応、文化と精神異常などの諸問題を扱う。

なお、社会人類学が文化人類学の一分野とされる理由は、文化人類学においては、イギリス流の社会人類学にあって対象からはずされた“文化”こそが研究の主題であり、社会組織や社会構造をも文化の一部としてとらえるからに他ならない。

以上に略述したように、民族学＝社会人類学＝文化人類学という等式は無条件には成り立ちがたい。しかし、さきにも触れたように、この三つの学問は人類の多様性の発見を出発点とし、その変異と類似の記述と説明を基本的課題とする点では共通している。そしてこの点は自然人類学（ヨーロッパ大陸では人類学）にもまた共通しているのである。アメリカ流の総合科学としての人類学を成り立たしめるものも、ただ自然人類学と文化人類学との算術的総和という単純な理由づけからではなく、両人類学の学問的な相互補助的關係に加えて、上記のような学問の出発点と基本課題の共通性のゆえにほかならないのである。

3 文化と民族

ここまでの叙述では、文化とか民族という用語を自明のものとして用いてきた。この両者は文化人類学の中心概念であり、この両概念を中心に文化人類学は成り立つ学問であるといってもよい。したがって、まずこの二つの概念の内容を明らかにしておく必要がある。

文化 日本語の中に現在使われているこの言葉は、元来英語の culture, ドイツ語の Kultur などヨーロッパの言葉の訳語であるが、そのヨーロッパではこの言葉に広狭二つの意味が付与されている。広くは人間の生活様式一般のことであり、狭い意味ではその中でとくに洗練されたもの、高尚なもの、高度に知的なものなどを指す。

この二つの意味、用法はそのまま日本語の文化の中にももちこまれており、たとえば前者の意味では“縄文文化”“古代文化”など、後者では“文化人”“文化国家”などの用例にみるとおりである。

文化人類学で用いる文化は、この第一の用法にもとづいている。そうした文化の概念規定として古典的なものは、人類学の父とも呼ばれるイギリスのタイラーのそれで、その概念規定はひとり文化人類学者のあいだでのみならず、ひろく社会学者一般の承認をうけている。タイラーによれば、「文化または文明とは、知識・信仰・芸術・法律・風習・その他、社会の成員としての人間によって獲得された、あらゆる能力や習慣を含む複合的全体である」(TYLOR, E. B., 1871) とされる。アメリカの文化人類学者ウィッスラーは、より簡潔に「歴史および社会科学においては、あれこれの人の生活様式を文化と呼ぶ」(WISSLER, C., 1923) と述べ、同じくアメリカの文化人類学者のクラックホーンもまた「人類学で“文化”というのは、一民族の生活様式の総体、個人がその集団からえる社会的遺産を意味する」(KLUCKHOHN, C., 1950) と称している。

こうした概念規定から明らかなように、文化は社会（集団）の成員によって習得され、共有され、そして社会的遺産として次代に伝達されていく生活様式である。それは人間の生物学的属性でもないし、個人的なものでもない。その意味で、文化は超有機的、超個人的なものと称することができよう。

ところで、このような文化は、外部に表われた個人の行動と、その産物とを通してしか知ることができないが、しかし行動やその産物そのものが文化なのではない。文化は、集団全体を通じて各人の行動やその産物に一様性もしくは規則性を与えているもの、つまり、集団の成員が行動の共通のよりどころとしている規準であって、クラックホーンの言葉を借りれば「(集団の成員が共有している) ある考え方、感じ方、信じ方、それが文化なのである」(同上書)。逆の言

い方をすれば、文化は行動の内容の抽象にほかならない。

民族 上に述べたように、文化は集団によって共有された生活様式である。この、生活様式すなわち文化を同じくする集団を民族と呼ぶ。ときとして民族と混同されがちな人種が、皮膚の色とか毛髪の形状等々のような遺伝的身体形質の異同によって区別された人類集団をさす、生物学的概念であるのに対して、民族は文化の異同を区別の指標とした社会学的概念である。

この場合、民族は単に一、二の文化要素を共有するだけではなく、理想的には文化内容のすべてにわたって共同性をもつ社会集団である。英語の *ethnic group* がこのような民族に当たる。ところで、われわれはその一方で、“未開民族”“文明民族”あるいは“採集狩猟民族”“遊牧民族”などという民族の使い方も、日常的にしばしば行なっている。この場合の民族が文化内容のすべてを共同にしているのではないことは、いうまでもない。それは“人びと”というほどの軽い意味の用法であり、英語では *people* に当たろう。

一般に文明社会では、交通の発達と活発な文化交流とに促されて、民族 (*ethnic group*) の規模が大きいのが普通である。他方、未開社会では文化を共同にする社会集団の規模が小さいので、これに対して日本語で上記と同じ民族という語を用いることがためられる場合もないではない。しかし、これも *ethnic group* であることに変わりはなく、民族の語をあてて少しもさしつかえないのである。部族・種族などの用語を当てる者もあるが、それらの概念規定を明確にしておかないかぎり、かえって混乱を招くばかりであろう。

このような民族の異同を画定することは、実は常に容易であるとは限らない。文化内容の項目によって、これを共にする集団範囲が異なるのはむしろ通例のことであるし、また異同の判断にも主観の入りこむ余地があるからである。それで、文化一般と関連するところが最も深く、かつ客観的に同定しやすくもある言語が、文化人類

学では民族分類の指標として広く用いられている。

下位文化 同一民族とされている人びとの間にも、文化のすべてにわたって完全な共通性が見いだされるわけではない。性別・年齢別に、あるいは身分・階層・職業などの別や、地域別に応じて、多少なり他と異なった文化が存在するのは、むしろ普通のことである。たとえば、よく言われる関東と関西の文化の違いや、“若者文化”などというのがそれに当たる。リントン（アメリカの文化人類学者）は、民族の中のある特定の人びとにだけ特有な文化を特殊文化（specialities）と呼んで、社会のすべての正常な成人に共有されている文化を指す普遍文化（universals）から区別した（LINTON, R., 1936）。民族の画定が普遍文化を中核になされなければならないことは、いうまでもあるまい。リントンの特殊文化は、下位文化（sub-culture）または部分文化（part-culture）と呼ばれることもある。

4 文化の統合と変化

文化の内容は多岐にわたるが、その多岐にわたる文化項目もしくは文化要素を網羅的に寄せ集めたところで、文化を理解したことにはならない。文化は、これを構成する諸要素が互いに連関し合って、多少とも統合された一個の全体をなし、そのような全体として個性をもつものだからである。言語において、同一の単語が、異なった文脈において違った意味をもつことがあるように、同一の文化要素も、異なった文化の中で常に同一の機能や意味をもつとは限らない。個々の文化要素を切りはなして見るのではなく、文化全体の脈絡の中において見るのでなければ、その真の理解に到達することは困難である。

文化を、これを構成する諸項目、諸要素の寄せ集め以上のものとするこうした捉え方は、古くから人類学者の間に多少とも認められ